市街地状況の違いと公園利用行動からみた公園に対する評価特性に関する基礎的研究

A Basic Study to Recognize the Relationships between Parks and its Surroundings in three Urban Areas of Different Characteristics

田中 美穂* 包清 博之** 杉本 正美***
Miho TANAKA Hiroyuki KANEKIYO Masami SUGIMOTO

摘要：街区公園などの人々に身近な公園に対する評価には、公園そのものの質以外にも、周辺市街地の状況に応じて存在するオープンスペースなどの環境要素や公園を利用する人々の行動が関係していると考えられる。そこで本研究では、周辺市街地の状況の違いと公園利用行動からみた公園に対する評価との関係を捉えることを目的とした。具体的には、市街地状況の異なる3地区をスタディエリアとし、公園に対する評価や利用行動に関するアンケート調査を行った。その結果、多様な周辺環境要素が存在すること、周辺環境要素が人々から「お気に入りの場所」として認識されること、立ち寄り行動などにより公園と関係づけられることの重要性を考察した。

1. はじめにー研究の目的ー

街区公園などの人々に身近な都市公園（以下、公園）は、居住環境の質に係わる貴重なオープンスペースの一つであり、居住環境の質的向上を目指してつくられた都市施設である。

近年、生活の変化や高齢化に伴い都市公園へのニーズも変化し多様化してきている中で、平成5年には都市公園制度改正に伴い、住区基幹公園の一つである児童公園は、利用者が児童に特定される名称および定義などが見直され、街区公園とされた¹⁾。また、平成9年には都市計画中央審議会答申で、「身の回りの道路、公園等の空間を質の高いオープンスペースとして体系的に整備していくこと」²⁾が指摘されるなど、公園の周辺に位置するオープンスペースなどの周辺環境要素との関係を基調とした、人々にとって身近な公園の整備が要請されてきている。

このような公園については、これまでから公園の保有する機能や配置など、公園そのものに関する研究事例が多くみられ³⁾⁴⁾、また、「都市の自由空間」⁵⁾や「都市のグリーンマトリックス」⁶⁾にみられるように、市街地の状況に応じて存在しているオープンスペースなどの多様性や質が居住環境の質に係わっていることなどが指摘されてきている。しかしながら、様々な市街地の状況に応じて公園を利用する人々が、公園と他のオープンスペースなどの周辺環境要素とをどのように関連付け、公園を評価しているのかについて言及しているものは殆どみられない。

そこで本研究では、周辺市街地の状況の違いと、公園利用行動からみた公園に対する評価との関係を捉えることを目的とした。具体的な調査・検討にあたっては、まず市街地状況の異なる3地区の住宅地をスタディエリアに設定し、次に、それぞれの地区での公園に対する評価や利用行動、公園の周辺に位置するオープンスペースなどの周辺環境要素を捉えるためのアンケート調査を実施し、その結果についてクロス集計した。

2. スタディエリアの設定とアンケート調査

本研究の目的に対応するため、スタディエリア及びアンケート調査内容は以下の如く設定した。

(1) スタディエリアの設定

現在の市街地の中で、住宅地及びその周辺に存在するオープンスペースなどの環境要素の特性は、①いわゆるスプロールによって形成された市街地、②計画的に開発された市街地、③土地区画整理事業によって整備された市街地といった市街地状況によって異なると考えられる。そこで、これらの市街地として、①に福岡県筑紫野市の二日市駅周辺（以下、二日市と称す）、②に同市の大型新興住宅地である光ヶ丘団地（以下、光ヶ丘と称す）、③に福岡県福岡市の塩原地区（以下、塩原と称す）をスタディエリアにとりあげ、調査・検討の対象とした。その中で、アンケート調査票の配布対象地は、図1に示した各市街地に位置する街区公園

図-1 スタディエリア

*日本造園学会正会員 **九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科 ***神戸芸術工科大学芸術工学部環境デザイン学科

の周辺地域（街区公園からの誘致距離圏とされている半径 250 m の範囲）とした。各市街地の概要は以下の如くである。

（i）二日市は、旧集落を中心として拡大してきた市街地であり、福岡の中心市街地である天神から電車で約 30 分という立地条件の良さから、マンションやミニ開発の分譲宅地が漸時建設され、いわゆるスプロール現象にある市街地である⁷⁾。そのため、公園や、神社、田畑などのオープンスペースが市街地の裏側に隠された状況にある。

（ii）光ヶ丘は、福岡都市圏・久留米都市圏の人口急増に対応し、「小郡・筑紫野ニュータウン計画」の中の 1 エリアとして平成 5 年に新たに開発された市街地である⁸⁾。地区内の主なオープンスペースとしては、公園や個人宅の庭があり、さらに公園とショッピングセンターをつなぐ歩行者専用道路がみられるが、他のオープンスペースはほとんど存在しない。しかし、団地の周辺部は市街化調整区域であり、そこには、田畑やため池等がある。

（iii）塩原は、県道 386 号線と福岡市内を貫流する那珂川に挟まれた市街地である。昭和 62 年に 15 年の年月を経て土地区画整理事業が完成している⁹⁾。地区内には、街路樹のある道、巨木を有する社寺境内、様々な生物が見られる那珂川の河川敷等がある。

（2）アンケート調査項目

アンケート調査では、公園とその周辺環境との関係からみた公園利用行動を把握するため、主に以下の設問内容を設定した。なお、公園の周辺に位置するオープンスペースなどの周辺環境要素の把握にあたっては、人々にとっての「お気に入り」の空間を創出することが生活の充実感を保証する¹⁰⁾と指摘されていることなどを踏まえ、地区ごとに「お気に入りの場所」として捉えた。

【公園利用に対する満足度に関する設問】；自宅周辺の公園に対する満足度について、①非常に不満、②やや不満、③どちらでもない、④やや満足、⑤非常に満足の 5 段階評定の設問とした。

【公園の利用頻度に関する設問】；自宅周辺の公園の利用頻度について、①めったにない、②年に数回、③月に数回、④週に数回、⑤ほぼ毎日の 5 段階評定の設問とした。

【お気に入りの場所の有無に関する設問】；自宅もしくはよく行く公園の周辺に「お気に入りの場所」があるかについて、「お気に入りの場所」となる可能性のある場所 18 項目を設定し、その中から該当する項目のすべてを選択する形式の設問を設定した。また、「お気に入りの場所」があると答えた被験者には、アンケート用紙に添付した地図にその場所を記入してもらう形式とした。

【公園利用の際にお気に入りの場所に立ち寄るかに関する設問】；公園利用の際にお気に入りの場所に立ち寄ることがあるかについて、①立ち寄る（A. 毎回 B. たいてい C. たまに）、②立ち寄らないの中から択一式の設問とした。また、①立ち寄る場合には、その理由を①公園に行く途中にあるから、②その場所が公園と近いから、③たくさん歩きたいから、④公園に行って帰るだけではつまらないの択一式の設問とした。

なお、各地区における被験者数は表 1 に示す如くであった。

表 1 各スタディエリアの被験者数

地区 アンケート	二日市	光ヶ丘	塩原
配布数	150 通	150 通	220 通
回収数	81 通	84 通	108 通
有効回答数	68 通	80 通	89 通

3. 公園の評価と利用

ここでは、公園の評価指標として、地区ごとに公園に対する満足度および利用頻度を取り上げて検討した。

（1）公園に対する満足度と利用頻度

公園に対する満足度の指摘割合は図 2 に示す如くである。二日市、光ヶ丘では、「③どちらでもない」が最も多く、塩原では、「③どちらでもない」で高い指摘割合がみられるものの、「④やや満足」の指摘割合が最も多くなっている。

利用頻度の指摘割合は図 3 に示す如くである。二日市では、「①めったにない」、「②年に数回未満」が高い割合を示している。光ヶ丘と塩原では、「①めったにない」で、光ヶ丘のほうが高い割合を示している以外は、類似した傾向となっている。

図 2 公園に対する満足度

図 3 公園の利用頻度

（2）利用者グループの設定

（1）での結果を踏まえ、公園に対する満足度と公園利用頻度から、公園の利用者グループを設定した。公園に対する満足度については、「①非常に不満」、「②やや不満」を不満傾向にあるとし、「⑤非常に満足」、「④やや満足」を満足傾向にあるとし、利用者を「満足」、「どちらでもない」、「不満」の 3 グループに分類した。公園の利用頻度については、「①めったにない」、「②年に数回」を「あまり利用しない」、「③月に数回」、「④週に数回」、「⑤ほぼ毎日」を「日常的に利用する」と分類した。次に、満足度および利用頻度の分類の組み合わせを検討し、図 4 に示す如く、A 1 の「満足・日常的に利用する」グループから C 2 の「不満・あまり利用しない」グループまで、6 つの利用者グループを設定した。

満足度	利用頻度	利用者グループ
満足	日常的に利用する	A 1 型
	あまり利用しない	A 2 型
どちらでもない	日常的に利用する	B 1 型
	あまり利用しない	B 2 型
不満	日常的に利用する	C 1 型
	あまり利用しない	C 2 型

図 4 公園に対する満足度と利用頻度からみた利用者グループ

表 2 各利用者グループに属する被験者数

グループ 地区	A1	A2	B1	B2	C1	C2	計
二日市	3	3	7	27	5	18	63
光ヶ丘	7	5	14	20	15	7	78
塩原	31	11	11	18	15	7	83

(人)

各グループに属する被験者数は、表2に示す如くである。二日市、光ヶ丘ではB2の「どちらでもない・利用しない」グループが最も多い。塩原では、A1の「満足・日常的に利用する」グループが最も多く、次いでB2の「どちらでもない・利用しない」となっている。

4. 「お気に入りの場所」への立ち寄りからみた公園利用行動特性
ここでは、公園の評価に係わると考えられる、公園と「お気に入りの場所」との関係を捉えるため、(1)地区ごとの「お気に入りの場所」の多様性と指摘数、(2)地区ごとの「お気に入りの場所」への立ち寄りからみた公園利用行動パターンの検討から、「お気に入りの場所」と公園利用行動との関係を検討した。

(1) 地区ごとの「お気に入りの場所」の多様性と指摘数
表3は、「お気に入りの場所」となる可能性のある周辺環境要素18項目の中で、それぞれの地区ごとの指摘数をまとめたものである。指摘された「お気に入りの場所」は、二日市で11ヶ所、光ヶ丘で11ヶ所、塩原で17ヶ所となっている。指摘数の比較的多い「お気に入りの場所」についてみると、二日市では、「②車のない道」、光ヶ丘では、「②車のない道」、「⑤自宅周りの路上」など、街路に関する空間が多い。塩原では、「①河原の原っぱ」、「④溜池や川」、「⑥神社や寺」、「⑦自宅の庭」、「⑪街路樹」、「⑰公園」など、自然系の周辺環境要素が存在し、ある一定の広さを有する多様な空間が多く指摘される傾向にある。これから、「お気に入りの場所」として指摘される周辺環境要素と認識特性に、地区によって違いが有ることが把握できた。

表-3 地区ごとの「お気に入りの場所」の指摘数

種類	①河原の原っぱ	②車のない道	③古い町並み	④溜池や川	⑤自宅周りの路上	⑥神社や寺	⑦自宅の庭	⑧スローパー等	⑨学校の運動場	⑩田畑あぜ道	⑪街路樹	⑫現代的町並み	⑬雑木林	⑭団地内広場	⑮ビル周り	⑯大きな木	⑰公園	⑱史跡・旧跡
地区																		
二日市	0	12	0	4	4	3	3	3	3	4	1	0	1	0	0	0	0	3
光ヶ丘	1	10	0	1	10	0	6	3	0	5	4	1	1	0	0	0	0	4
塩原	19	9	3	30	9	28	14	13	8	1	18	1	3	2	0	8	53	3

(表中の数字の単位は人)

(2) 地区ごとの「お気に入りの場所」への立ち寄りからみた公園利用行動パターンの検討

ここでは、まず、「お気に入りの場所」への立ち寄りからみた公園利用行動パターンを図5に示す如く設定した。以下、このパターンを基調に地区ごとの公園利用行動パターンを検討する。具体的には、地区ごとの(i)お気に入りの場所の有無と立ち寄り、(ii)お気に入りの場所へ立ち寄る理由および頻度について、把握、検討した。

図-5 「お気に入りの場所」への立ち寄りからみた公園利用行動パターン

(i) お気に入りの場所の有無と立ち寄り
「お気に入りの場所」があるとした被験者の割合についてみると、図6に示す如く二日市で19%、光ヶ丘で23%である。塩原

では、「お気に入りの場所」がある人が74%となっており、他の2地区とは大きく異なる特徴をみせている。また、公園利用の際に「お気に入りの場所」に立ち寄るとした人の割合についてみると、二日市で23%、光ヶ丘で56%、塩原では36%となっている。これらと、市街地の状況や前節(1)での内容を踏まえると、二日市や光ヶ丘では「お気に入りの場所」が比較的街路に関する空間に限定されている一方で、塩原では自然環境要素の存在する市街地状況が、塩原での「お気に入りの場所」があるとした被験者の多さに寄与していると考えられる。

図-6 「お気に入りの場所」への立ち寄りからみた公園利用行動のパターンの割合

(ii) 「お気に入りの場所」に立ち寄る頻度及び理由
「お気に入りの場所」があり、公園利用の際に「お気に入りの場所」に立ち寄るとした被験者の、「お気に入りの場所」に立ち寄る頻度は、図7の如くである。なお、二日市では、「立ち寄る」とした被験者が3名であったため、ここでは光ヶ丘と塩原について検討した。

光ヶ丘では、「毎回」もしくは「たいてい」立ち寄る被験者の割合が56%である。塩原では、「毎回」もしくは「たいてい」立ち寄る人の割合が15%であり、「お気に入りの場所」に立ち寄る頻度に、両地区の間で大きな特徴の差が見られた。このように、光ヶ丘において「お気に入りの場所」への立ち寄りが顕著に多い背景には、「お気に入りの場所」として多く指摘されている「①車のない道」や「⑤自宅周りの路上」が、公園とショッピングセンターや公園同士をつなぐ歩行者専用道路を示していることが考えられる。

図8は、公園利用の際に「お気に入りの場所」に立ち寄る理由を示している。その内訳をみると、「その場所が公園に近い

図-7 「お気に入りの場所」に立ち寄る頻度

図-8 「お気に入りの場所」に立ち寄る理由

から、「その場所が公園へ行く途中にあるから」といった移動行動に関するものが、光ヶ丘では80%以上、塩原では70%弱と両地区とも大半を占めている。「たくさん歩きたいから」という理由は、光ヶ丘の8%に対して塩原では27%と高い。これら「お気に入りの場所」に立ち寄る頻度と立ち寄る理由から、光ヶ丘に比べ塩原の方が、自発的に公園と「お気に入りの場所」との間の立ち寄り行動を行っている人々が多いことが推察できる。

5. 利用者グループと公園利用行動に関する検討

ここでは、これまで捉えてきた市街地状況ごとの「評価特性からみた利用者グループ」と「お気に入りの場所への立ち寄りからみた公園利用行動パターン」の特性から人々の公園に対する満足度に係わる公園利用行動を検討した。具体的には、3. で設定した利用者グループと4. で設定した公園利用行動パターンとの関係について図9に示す如く把握し、検討した。図9は、図5に示した地区ごとの、A1「満足・日常的に利用する」からC2「不満・あまり利用しない」までの利用者グループの人数割合と、それぞれの利用者グループについて、①「お気に入りの場所があり、公園利用の際に立ち寄る人」、②「お気に入りの場所があり、公

園利用の際に立ち寄らない人」、③「お気に入りの場所がない人」の人数の割合を示したものである。

この図9と、地区ごとの市街化状況の違い、お気に入りの場所の多様性と指摘数との関係を以下の如く把握した。

- ・二日市では、特にB2、C2の公園をあまり利用しない人の割合が高く、またその大半は「お気に入りの場所」がないことが窺える。
- ・光ヶ丘では、二日市に比べてB1、C1の公園を日常的に利用する人の割合は高いが、「お気に入りの場所」がない人が多く、また公園に対する満足度は高いとは言えない。
- ・塩原では、他の2地区と比較してA1の公園に対して満足しており、日常的に利用する人の割合が高く、その中の多くの人は「お気に入りの場所」があり公園利用の際に「お気に入りの場所」に立ち寄りとしている。

以上の把握内容から、無秩序に拡大した市街地である二日市では、様々なオープンスペース等の周辺環境要素の存在に係わらず、それらの空間は「お気に入りの場所」として認識されることは殆どなく、公園に対する満足度も高くないことが窺える。また、新たに開発され、特定のオープンスペースしか存在しない光ヶ丘では、日常的に公園が利用される傾向がみられるが、「お気に入りの場所」がほとんど認識されておらず、二日市と同様に公園に対する満足度は高くない。一方、区画整理事業が行われたが、巨木を有する社寺や河川敷など自然系の環境要素が存在する塩原では、他の2地区と比較して「お気に入りの場所あり・立ち寄り」とする人の割合が高く、また公園に対する満足度や利用頻度の高い人の割合も高い傾向にあることが窺える。

以上から、人々の公園に対する満足度の向上のためには、多様なオープンスペースなどの周辺環境要素が確保されるとともに、それらが人々から、「お気に入りの場所」として認識され、立ち寄られることが重要な条件となることが推察できる。

6. おわりにーまとめー

本研究では、主にアンケート調査の結果を通して市街地状況の違いと公園利用行動からみた公園に対する評価特性を検討してきた。この結果、公園と周辺に存在する「お気に入りの場所」とが立ち寄り行動によって関連付けられることの重要性が認識できた。さらに、本論で検討した立ち寄りといった回遊性を伴った公園利用行動に関する計画的諸条件を明らかにすることが、公園に対する満足度の向上のための課題となると考える。

図ー9 「評価特性からみた利用者グループ」と「お気に入りの場所の有無からみた公園利用行動パターン」

参考・引用文献および補注

1) 建設省都市緑地課監修／公園緑地協会編著 (1993) : 改正 都市公園制度Q&A, 206pp.	4) 建設省都市局公園緑地課都市緑地対策室 (1994) : 公園緑地マニュアル「改訂版」: 日本公園緑地協会, 566pp.	ラン, 94pp.
2) 建設省都市局 (1997) : 都市計画中央審議会答申「今後の都市政策について」 http://www.moc.go.jp/city/singikai/sn03.html	5) 鳴海邦碩 (1982) : 都市の自由空間 : 中公新書, 191pp.	8) 小郡・筑紫野ニュータウン総合開発協議会 (1998) : 小郡・筑紫野ニュータウン : パンフレット
3) 社団法人日本造園学会編 (1993) : ランドスケープ大系第2巻 ランドスケープの計画 : 技報堂出版, 275pp.	6) 田畑貞寿 (1979) : 都市のグリーンマトリックス : 鹿島出版会, 269pp.	9) 福岡市都市整備局都市開発部塩原区画整理課 (企画・編集) (1998) : 塩原地区区画整理誌, 316pp.
	7) 福岡県筑紫野市都市建設部都市計画課 (1999) : 筑紫野市都市計画マスタープラン, 94pp.	10) 前掲5)

Summary : The quality of visitors' park experience depends on the relationship between the park and it's Surroundings. In three districts (Futsukaichi, Hikarigaoka, Shiobaru) surveys of questionnaires were carried out in order to understand usage pattern and the rate of satisfaction. The surveys indicate that providing convenience and wide range of activity areas around the park, the quality of the park experience would improve.